

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24500693

研究課題名(和文)多様な動きからみる幼児期の運動遊びの検討～小学校低学年体育科とのつながりと相違

研究課題名(英文) Examination of exercise play in kindergarten based on fundamental movement patterns -Similarities and differences with the physical education of the first two years of elementary school

研究代表者

吉田 伊津美 (YOSHIDA, Izumi)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：30335955

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：幼稚園の運動遊びと低学年体育に見られる基本的な動きを明らかにし、両者の比較から幼稚園の運動遊びと指導のあり方を見直し、その効果を検証した。

45種の基本的な動きのチェック表を用い、幼稚園4歳児、5歳児、小学校1年生、2年生の各クラス担任が各学期3年間にわたり評定した。その結果、頻度の高い(低い)動きが明らかとなった。動きの評定結果から幼稚園での運動遊びを見直した。これにより幼児の運動遊びへの取り組みの変化や運動能力の向上が認められた。また、幼稚園5歳児3学期には頻度の高い動きの種類が半数を超えて見られたのに対し、小学校1年生は年間を通して頻度の高い動きの数は極端に少なかった。

研究成果の概要(英文)：Fundamental movement patterns and instruction given during kindergarten exercise play and early elementary school physical education were compared and evaluated. Each class teacher (4-year-olds class, 5-year-olds class, first grade class, second grade class) used a checklist of 45 kinds of fundamental movement patterns, rating these patterns over three semesters per year for three years. Both low and high numbers of fundamental movement patterns were found. Changes were subsequently made to the kindergarten exercise play. Improvements to attitudes regarding the exercise play and motor ability were seen. While the first graders of elementary school extremely low numbers of fundamental movement patterns throughout the year, the 5-year-olds had frequent fundamental movement patterns for over half the third semester.

研究分野：身体教育学 幼児教育学

キーワード：基本的な動き 幼児 低学年 運動遊び 体育

1. 研究開始当初の背景

幼少年期は基本的な動きを獲得する敏感期である。さまざまな遊びの中での動きの経験が結果的にその動きを獲得させ、その獲得した基本的な動きは小学校以降の運動の基盤となる。子どもの運動能力低下が指摘されて久しいが、これらの測定で明らかにされる量的な(測定値の)低下だけでなく、身のこなしのような動きの側面、すなわち質的な低下も指摘されている(中村ら 2009、森ら 2010)。このような問題を受け、日本体育協会は平成 17 年度から 19 年度にかけて「幼少年期に身につけておくべき基本運動(基礎的動き)に関する研究」を行ない、人間の基礎的な動きについて幼少年期の習得の実態、その評価法、習得法の提案を行った。また、2008 年告示の小学校学習指導要領では、小学校低・中学年で新たに「多様な動きをつくる運動(遊び)」が内容として位置付けられた。

この現状の中、多くの幼稚園では健康や体力づくりを意識した取り組みを行っている。しかしその指導の中心は幼稚園教諭以外の運動指導者に任せる形で行われ、特定の運動活動に限定されている傾向が多く見受けられる(吉田・岩崎 2010)。そしてこのような指導を多く行っている園ほど幼児の運動能力が低く(杉原ら 2004、杉原ら 2010)、幼児教育における運動指導のあり方には問題点があることが指摘されている。一方、特別な運動活動を行っていない幼稚園では、少しずつではあるが多様な「動き」を意識して運動遊びを実践しようとする園もみられるようになってきた。しかし、幼稚園教諭の動きについての認識は十分とはいえず、教育課程に取り上げられている運動遊びでは十分に体を動かすことに重点が置かれているにとどまっている。また、幼稚園では全ての子どもが楽しんで運動遊びに取り組むような援助を行っているものの、小学校低学年においてはすでに運動習慣の違いや運動への取り組みの差、運動技能の個人差がみられている。就学後に運動に対する取り組みや動きの獲得に差がみられるとすれば、幼児期の運動経験に課題があるのではないだろうか。

2. 研究の目的

本研究の目的は、発達の連続性の立場から

- (1) 幼稚園の運動遊びで幼児が経験している基本的な動きの種類を明らかにすること
- (2) 小学校低学年の体育科で経験している基本的な動きの種類を抽出すること
- (3) 両者の比較からその違いを明らかにし、これをもとに幼稚園における運動遊びと指導のあり方を見直すこと
- (4) 幼稚園の教育課程に位置づけた運動遊びを実践することによりその効果を検証することであった。

3. 研究の方法

- (1) 対象 東京都公立幼稚園 1 園とその園が併設している公立小学校 1 校(卒園児が進学する率の高い学校園)。
- (2) 幼稚園と小学校低学年体育で見られる動きの抽出 石河ら(1980)、森ら(2010)、阿江ら(2007)、小学校学習指導要領解説体育編を参考に基本的な動きのリストを作成(45 項目)。4 歳児 5 歳児 1 学年 2 学年のクラス担任に 5 段階で評定を依頼した。3 年間各年度各学期の終わりに実施した。
- (3) 体力・運動能力検査 幼児は MKS 幼児運動能力検査の 5 種目(25m 走、立ち幅跳び、ソフトボール投げ、両足連続跳び越し、体支持持続時間)。児童は新体力テストの 3 種目(50m 走、立ち幅とび、ソフトボール投げ)と両足連続跳び越しの計 4 種目。実施は各年度 6 月～7 月であった。
- (4) 身体活動量の計測 承諾の得られた 5 歳児 2 クラス計 27 名と担任教諭 2 名を対象にライフコーダ EX(スズケン社製)を装着した。実施は 2013 年 12 月 3 日～16 日の 14 日間であった。
- (5) 幼稚園における運動遊びの見直しと教育課程への位置づけ 園内研究会において幼稚園教諭と申請者とが協議する形で実施した。
- (6) 効果の検証 運動能力検査、身体活動量、担任および保護者による運動遊びへの取り組み等の評価により行った。

4. 研究成果

- (1) 幼稚園の運動遊びで観察された基本的な動き

幼稚園 4、5 歳児の年間を通して高頻度に観察された基本的な動きは、「立つ・すわる、しゃがむ」「走る」の安定・移動系の動き 2 種と、「つかむ」「運ぶ・動かす」「積む・のせる」の操作系 3 種であった。これらに加え 4 歳児は「止まる」「押す」など 3 種、5 歳児は「おりる」「しばる・むすぶ」など 3 種も年間を通して高頻度であった。また時期により高い頻度で観察された動きは 4 歳児は「スキップする・はねる」「投げる」「ける」など、5 歳児は「投げる」「ぶらさがる」「うける・捕る」などがあつた。一方、「逆立ちする」は 4、5 歳児年間を通して頻度なしで、その他 4 歳児では「こぐ(ブランコ)など」「おぶうーおぶさる」、5 歳児では「掘る」が年間を通して観察されなかった。45 種の基本的な動きのうち 4 歳児では 42 種、5 歳児では 43 種が年間を通して観察され、多様な動きの経験をしていた。また、5 歳児は 1 学期から 3 学期にかけて高頻度で観察される動きの種類が多くなる傾向にあり、3 学期では 45 種中 24 種(53%)と半数以上を占めていた。これに対し、観察されない動き(頻度なし)は 4、5 歳児年間を通して 10%前後とほぼ一定の割合で、時期による種類に違いはなかった。これ

らのことから、もともと人の行為として出現しやすい動きと、環境（物理的な環境、流行の遊びなど）によるものが関係していると考えられた。また加齢に伴いよりダイナミックな活動へと移行し5歳児3学期はより多様な動きの経験をしていた。

(2) 小学校体育科で観察された基本的な動き

小学校低学年体育で年間を通して高頻度に観察された基本的な動きは、「走る」1種であった。これに加え2学年は幼児期と同じ「立つ・すわる、しゃがむ」の他、「追いかける・逃げる」「かわす・よける」「振る」など5種も頻度が高かった。1学年は「走る」以外に年間を通して頻度の高い基本的な動きはなかった。2学年は「ける」「うける・捕る」「ころがす」など操作系は学期によって高い頻度でみられ、時期による違いがあった。一方、「掘る」「逆立ちする」「こぐ(ブランコなど)」「こぐ(乗り物を動かす)」は、年間を通して1、2学年で観察されなかった。年間を通してみれば1学年2学年とも41種の基本的な動きが観察された。1学年で頻度の高い基本的な動きは1学期で2種(4%)、2学期6種(13%)、3学期3種(7%)であり(図1)、2学年および4、5歳児と比較して極めて少なかった。さらに、1学年で観察されない基本的な動きは年間を通して30%前後で幼児期および2学年より高い割合であった。「多様な動きをつくる運動遊び」の4つの運動遊び(体のバランスをとる運動遊び、体を移動する運動遊び、用具を操作する運動遊び、力試しの運動遊び)の分類でみると(図2)、1学年は「力試しの運動遊び」に分類される基本的な動きの頻度が年間を通して特に低く、頻度が高く観察された基本的な動きはみられなかった。「力試しの運動遊び」は低学年のうち2学年2学期を除き頻度の高い基本的な動きは観察されておらず、児童が体育の授業の中ではあまり経験していない動き、あるいは限られた回での経験であると考えられた。また2学年

は「体のバランスをとる運動遊び」に分類される基本的な動きの頻度が年間を通して高かった。

これらのことから、2学年は体育の授業において多様な動き経験しているが、1学年はごく限られた動きしか経験していない可能性が示唆された。実際の1学年の活動が限定的になっているのか、観察者の評価が関係しているのかは今後のさらなる検討が必要である。

(3) 幼稚園の運動遊びと小学校低学年体育科で観察された動きの比較

図1は各学年学期ごとの動きと頻度との関係を示したグラフである。45の基本的な動きのうち「ほとんど毎日(回)」のように見られた動きは、5歳児で1学期から3学期にかけて20%→40%→53%と増加していたのに対し、1学年は4%→13%→7%と年間を通して非常に少なかった。また「まったく見られない」動きは5歳児の11%→9%→7%に対し、1学年は33%→27%→36%と観察されない動きの種類が非常に多かった。4歳児から5歳児の2、3学期にかけていろいろな動きの頻度が高くなるが、1学年では極端に低くなり、2学年は頻度の高い動きが20%→33%→24%と再び多く観察される傾向であった。幼児期には多様な動きのレポーターを経験しているが、小学校1学年の体育の授業では幼児期の経験を踏まえた内容とはなっていない可能性が示唆された。

図2においてもすべてのカテゴリにおいて幼児期(特に5歳児)は2学年と同等またはそれ以上の動きの頻度が高く観察されていたのに対し、1学年はいずれのカテゴリにおいても頻度の低い動きの割合が高かった。また全体的に「力試しの運動遊び」に類する動きは観察される頻度は低く、1学年は顕著に少なかった。押す、引く、運ぶ、おんぶするなどの動きの経験が少ないことが示唆された。

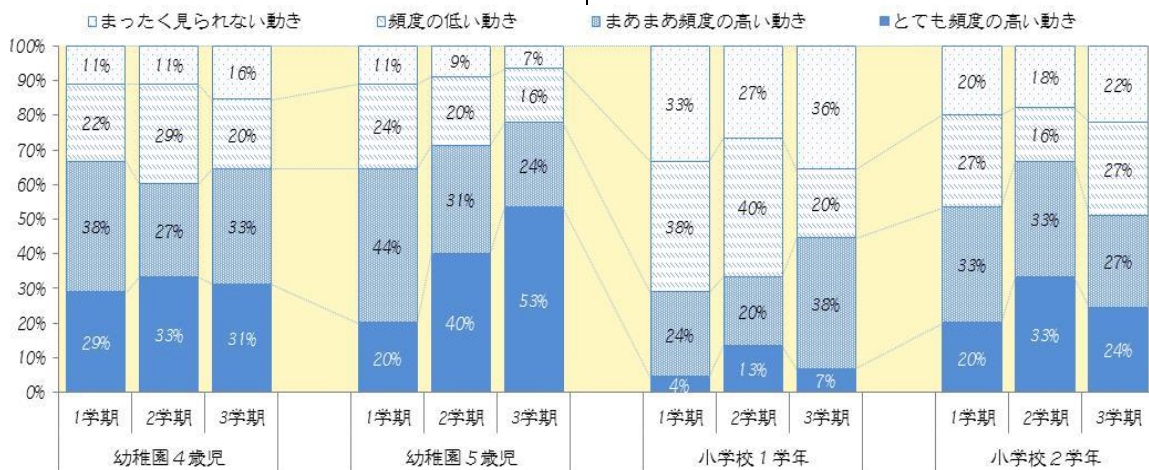


図1.学年ごと各学期に観察された基本的な動きの頻度(3年間の平均)

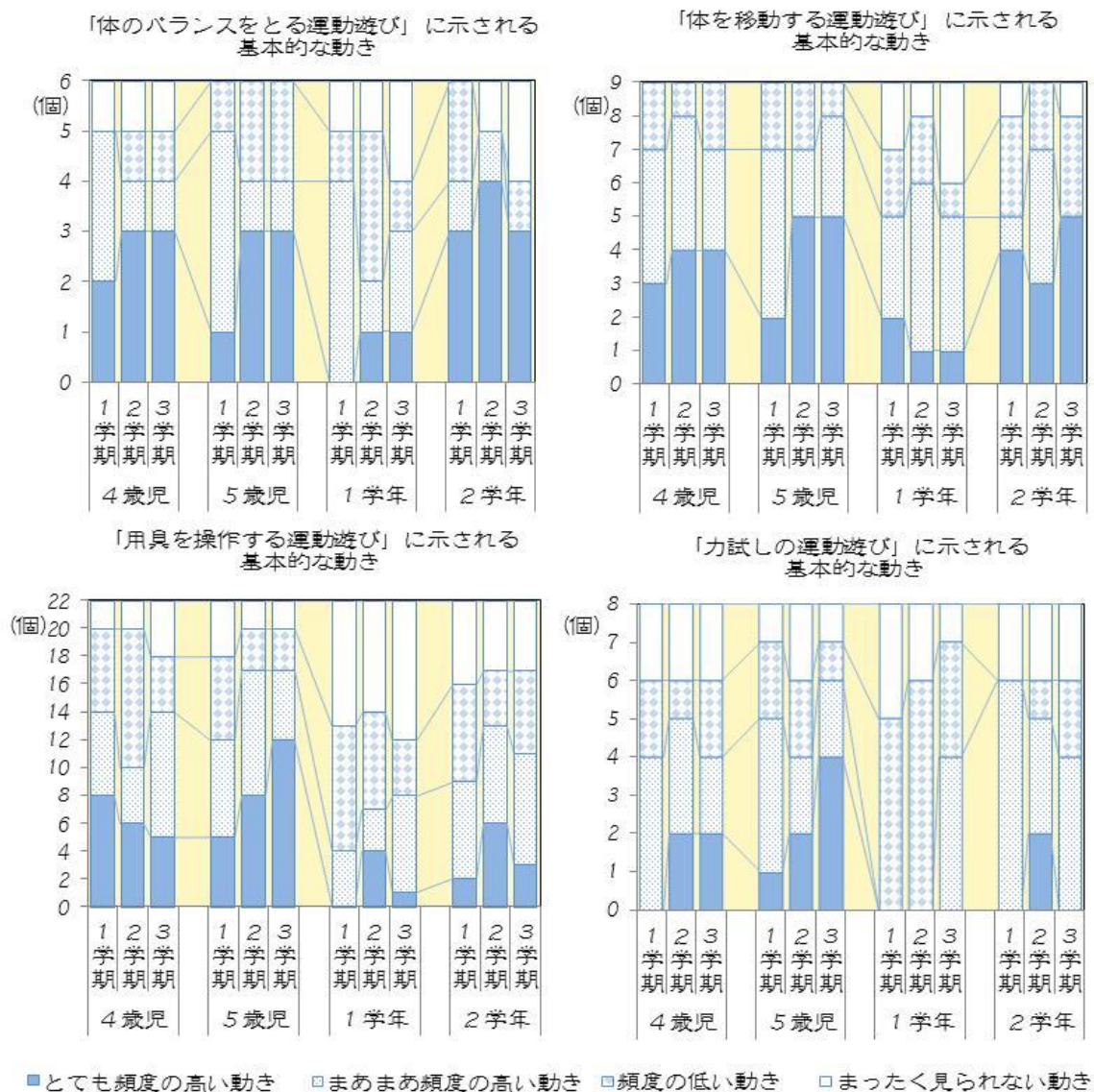


図 2.多様な動きをつくる運動遊びの分類ごとにみた観察された基本的な動き (3年間の平均)

(4) 幼稚園における運動遊びの見直しと教育課程への位置づけ、および効果の検証

幼稚園での運動遊びを動きの視点等から見直した結果、小学校入学後に対象園出身児童の運動能力が他園出身者と比較し有意に高い種目があり、取り組みの効果が認められた。実際、幼稚園にいる時間帯は降園後や休日と比較して運動強度が高く、運動遊びが積極的に行われていた。また担任は、幼児の運動遊びへの取り組み方について進んで戸外に出るようになったこと、体を動かす遊びに積極的に取り組むようになったことを強く実感していた。さらに保護者においても体を動かすことが好きであると評価する回答の割合は高かった。担任は年間を通して幼児が経験している動きの種類が増加したと感じており、多様な動きを引き出すための配慮が効果的になされていたと考えられた。このような担任の動きに対する気づきや認識の変

化も本研究を通して認められており成果の一つとしてあげられるだろう。

本研究の成果をまとめたリーフレットを作成、園の取り組みを見直すための資料として幼稚園等に配布、啓発を図った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① YOSHIDA Izumi, Comparison of Preschoolers' Exercise Intensity at Kindergarten and at Home, The Asian Journal of Child Care, 査読有 6 2015, 13-21

[学会発表] (計3件)

- ① 吉田伊津美 測定データや遊びの記録を

活かした保幼小の接続をめざして 日本
 保育学会第66回大会実行委員会企画シン
 ポジウム 1(記録でつなげる：保幼小の内
 容・方法の接続をめざして)(招待講演)
 2013年5月11日 中村学園大学(福岡県)

②吉田伊津美 幼稚園の運動遊びと小学校
 低学年で観察される基本的な動き 日本
 発育発達学会第12回大会 2014年3月
 16日 大阪成蹊大学(大阪府)

③吉田伊津美 幼稚園児における幼稚園と
 家庭との運動強度の比較 The 6th Asian
 Society of Child Care 2014年9月14日
 Howard Plaza Hotel Taipei(Taipei,
 Taiwan)

〔図書〕(計1件)

①吉田伊津美 東洋館出版社 楽しく多様
 であること 白旗和也(監) 小学校体育
 これだけはしっておきたい! 「低学年指
 導」の基本 2015 (印刷中)

6. 研究組織

(1)研究代表者

吉田 伊津美 (YOSHIDA Izumi)
 東京学芸大学教育学部・准教授
 研究者番号：30335955

研究成果リーフレットの表紙・裏表紙



リーフレットの内容(一部)

